

Title	地圖學的見地よりする馬王堆出土地圖の検討
Author(s)	海野, 一隆
Citation	東方學報 (1979), 51: 59-82
Issue Date	1979-03-15
URL	http://dx.doi.org/10.14989/66566
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

地圖學的見地よりする馬王堆出土地圖の檢討

海 野 一 隆

は し が き

前漢の長沙丞相利蒼の息子の墓と目される馬王堆三號漢墓から出土した絹本地圖は、紀元前二世紀という早い時期の作品であるだけに、その發見のニュースは當時世界の耳目を集めた。出土した三種の地圖のうち、「地形圖」と假稱されるもの及び「守備圖」または「駐軍圖」と假稱されるものについては、すでに復原を終え、一應の調査結果も公表されている。その報告類は『文物』誌上に見ることができ、一九七七年三月に地圖の複製寫眞版および復原圖を添えた關係論文六篇から成る『馬王堆漢墓帛書古地圖』が文物出版社から刊行され、われわれは一層手輕にこれら二種の圖の概要を知ることができるようになった。この出版物がわが國に輸入された直後、私が末席を汚している京都大學人文科學研究所科學史研究班の班長山田慶兒氏は、丁度よい機會であるから、これらの地圖について話をするようにと、慫慂された。その時期としては秋頃という山田氏の希望であつたが、當時私は多忙であつたため、準備期間を考慮に入れて年が明けてからということにして貰い、一月下旬漸く班の定例會においてその責を果したのであつた。

席上質問や意見が續出し、私は思ひがけないいくつかの大きな收穫を得ることができた。散會の折、今日の話を原稿にして提出してほしいと山田氏から依頼されたが、今後尙檢討すべき事柄も残っている、書くとしてもかなりのちになるであらう。

うと答えておいた。ところがその後の山田氏の督促は意外に厳しく、また私自身としても日を延ばすことによって果してどれほど進展が期待できるか心許ない面もあるので、不備は覺悟の上でともかく定例会において話した内容を、席上提供して頂いたいくつかの貴重な御意見と合せてここに公表することとした。採用させて頂いた御意見の提出者の芳名は、感謝の意をこめてそれぞれの箇所に明記するであらう。

一 馬王堆出土地圖關係の文獻

既述のように三號漢墓からは三種の地圖が出土したと報じられているが、残りの一種については、縣城の平面圖（街房圖）で、城垣（城牆）・城門・房屋などが描かれていると言った程度の報告しかなく、寫眞版も調査報告も何一つ發表されていない。すでに内容が公表されている二種の圖にしても、われわれは容易に實物に接することはできず、寫眞版や調査報告に基づいて議論するほかないので、先ず信賴できる文獻を確定しておく必要がある。上述の『馬王堆漢墓帛書古地圖』（以下『帛書古地圖』と略稱する）に收められる六篇の論文を先ず検討してみると、これらはすべて過去において『文物』誌上に發表されたものである。以下しばしばこれらの論文を引用するので、その題目と『文物』掲載號を示しておくと、次の如くである。

- (一) 馬王堆漢墓帛書整理小組「長沙馬王堆三號漢墓出土地形圖的整理」……『文物』一九七五年第二期⁽²⁾
- (二) 復旦大學歷史地理研究室・譚其驤「二千一百多年前的幅地圖」……『文物』一九七五年第二期
- (三) 譚其驤「馬王堆漢墓出土地圖所說明的幾個歷史地理問題」……『文物』一九七五年第六期
- (四) 馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆三號漢墓出土駐軍圖整理簡報」……『文物』一九七六年第一期
- (五) 詹立波「馬王堆三號漢墓出土的守備圖探討」……『文物』一九七六年第一期
- (六) 周世榮「有關馬王堆古地圖的一些資料和幾方漢印」……『文物』一九七六年第一期

このように執筆者・標題共に『帛書古地圖』所收論文は、『文物』既刊號掲載のものと同じであるにもかかわらず、出版者はそのことについて一言も觸れていない。論文集巻頭の〈出版説明〉の日附が一九七五年十二月となっているところを見ると、一九七六年一月発行の『文物』誌上に發表された前掲三篇は、原稿の段階ですでにこの企畫に流用されていた可能性があるが、『文物』掲載論文に見られる「儒法鬭爭」「法家」などの文字及び關連記事が『帛書古地圖』ではすべて削除ないしは内容變更されているので、一九七五年十二月という時期は企畫開始の段階であつて、實際に原稿内容に手が加えられたのは、すでに儒家攻撃運動が終息してからであつたと思われる。いずれにせよ、『文物』掲載論文六篇の内容の一部を改訂したものが『帛書古地圖』の論文である。しかし改訂部分は思想鬭爭路線の變更に基づく箇所に限られており、地圖そのものを論議する上では何ら影響するところがない。従つて現在のところ『帛書古地圖』（論文集一冊、圖版四枚）さえあれば、出土地圖二種についての情報には事缺かない。ただ残念なことに、『帛書古地圖』には原色版が皆無なので、原本の着彩狀況を知るためには左記の文獻に依らねばならない。

『中國畫報』一九七四年十一月號（地形圖・駐軍圖それぞれの部分の原色版）

『中國畫報』一九七五年九月號（地形圖の全體及び九嶷山附近の原色版）

『文物』一九七六年第一期（駐軍圖の部分の原色版）

なお念のため申し添えておくと、前掲の『文物』一九七五年第二期掲載の二篇の論文については、その和譯が『地圖情報』第六號（昭和五十年十月）・第七號（昭和五十一年一月）に掲載されている。

原本の復原その他に直接従事した人々の調査報告ならびに原本の寫眞複製が、何にも増して重要な根本的資料であることは言うを俟たないが、このほかにそれらに基づいてなされた諸氏の論考いわば二次的文獻も無視するわけにはゆかないので、管見の及ぶ限りのものをここに列舉してみると次の通りである。

(i) Howard Nelson, *Maps from Old Cathay. Geographical Magazine, August, 1975*

- (D) Akio Funakoshi, Some New Lights on the History of Chinese Cartography. (『奈良女子大學文學部研究年報』十九號 一九七五年)

- (E) 陳正祥「中國古代地圖學之發展」(『香港中文大學中國文化研究所學報』八卷一期 一九七六年)

- (F) 船越昭生「近年出土の漢代地圖について——長沙馬王堆出土帛書地圖と和林格爾出土壁畫地圖——」(『鷹陵史學』一九七七年三・四號)

- (G) Mei-Ling Hsu, *The Han Maps of the Second Century B. C.: Their Quality and Historical Importance. A shortened version prepared for the Seventh International Conference on the History of Cartography, 1977*

- (H) 曹婉如「馬王堆出土的地圖和裴秀制圖六體」(『自然科學史研究所主編『中國古代科技成就』一九七八年)

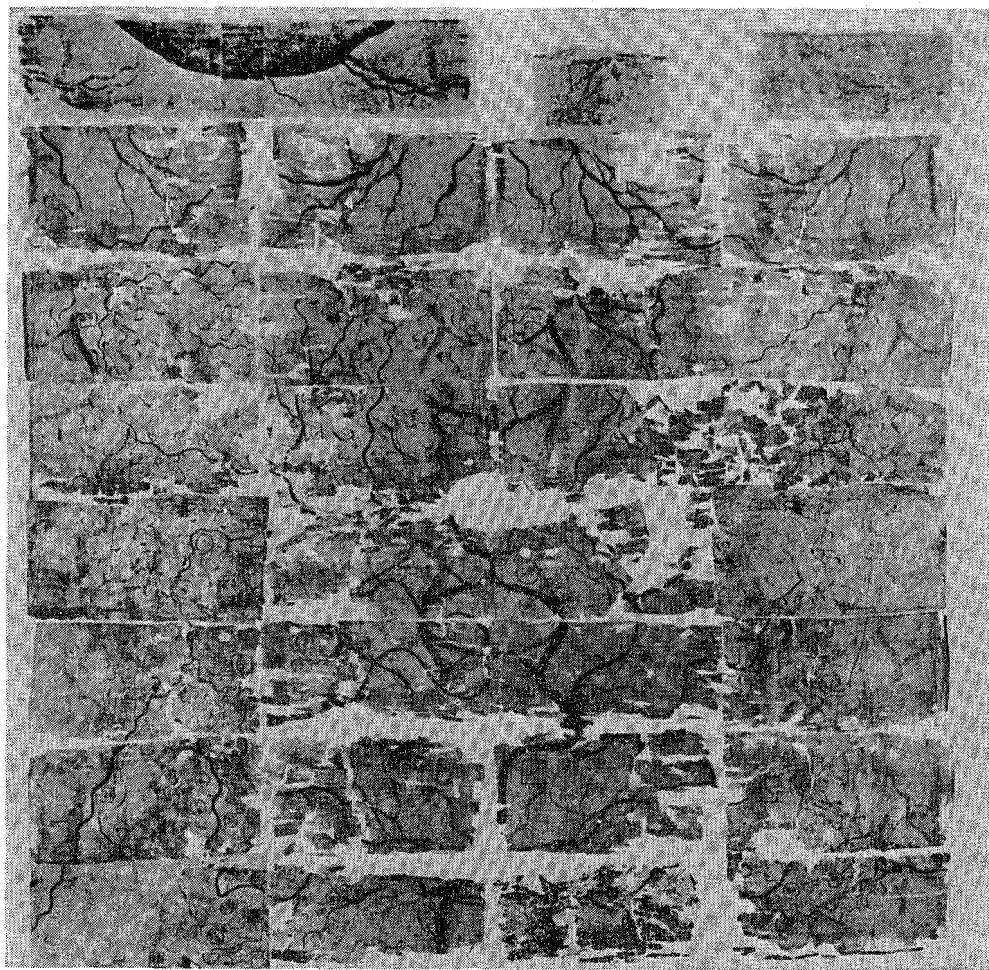
(I) のネルスン氏のものは、中國地圖學史の概略であり、掲載誌が通俗的性格の強いものだけに、駐軍圖の部分寫眞を掲げ、紀元前一五〇年頃の地圖が発見されたことを簡単に述べるに過ぎず、メソポタミアの粘土板地圖を別にすればいかなる文明圏を通じて最も古の手書地圖であると結んでいる。(J) の論文は標題の如く近年新たに知られるようになった地圖學的作品を紹介したもので、その一部として馬王堆出土地圖を扱っているが、『文物』誌上に發表された調査報告に基づいて概要を述べるにとどまっている。(K) は馬王堆地圖から明代の諸地圖に至る通史的な内容のもので、脱稿が一九七五年十月であるため、それ以後に刊行された駐軍圖關係文獻は参照されておらず、『文物』記事の要約という感が深い。(L) は同じ執筆者の(J) 論文に比べると、焦點を漢代の地圖に絞った關係から、馬王堆地圖についてもかなり詳細に論じられていて、『文物』記事以上の考察がなされている。論點についてはのちに觸れるので、ここでは割愛しておく。(M) は筆者が出席した昨夏の第七回國際地圖學史會議(米國、ワシントン市)において参加者に配布されたペーパーの一つで、本文二四頁、圖版八頁から成る。馬王堆地圖二種の内容、地圖學史的背景などを述べ、特に各種の記號に深い關心を示すが、『文物』記事以上に出るものではない。なおこの論考はのち多少内容に手を加えて *The Han Maps and Early Chinese Cartography* と改題され、*Annals of the Association*

of American Geographers, Vol. 68, No. 1, March 1978 に掲載された。⁽³⁾ (b)は圖版共九頁の短篇で、『文物』記事の要約に過ぎない。

以上見たように、馬王堆地圖に言及する論文の多くは、中國地圖學史の一齣としてそれに觸れるかまたは單獨にやや詳しく述べる場合でも、ほとんどが『文物』記事の踏襲であり、(二)の船越氏のものを除いては、これと言った新たな見解を示すものはない。要するにわれわれは未だ皮相的な調査報告の類に接するだけで、本格的な研究を持ち合せていないのである。もっともこの場合地圖學的不是は地圖學史的な觀點からなされたものと言う意味であって、地圖に盛られた政治史的・軍事的・經濟史的・社會史的な各種の情報についての分析はおのずから別問題である。馬王堆地圖が語りかけてくるこの種の情報の理解はすでに譚其驤によって試みられており(前掲(二)の論文)、圖中の地名と『漢書』地理志所載地名との比較においてかなりの成果を擧げている。文獻のみでは十分に理解できなかった漢代社會の各種事情が、これらの地圖から解明に導かれることも少なくないであろうが、本稿ではいわゆる「地圖に見る○○」と言った類いの事柄は扱わないこととする。

二 馬王堆地圖の地圖學的考察

本題に入る前に、念のため馬王堆出土地圖についての概略を述べておくと、地圖は一九七三年十二月の發掘によって出土した長方形の漆塗の箱の中に他の帛書と共に收められていたという。折目はボロボロになっていてあとかたもなく、斷片として数えると、地形圖が三十二枚、駐軍圖は二十八枚を認めたと報告されている。各布片は水分のため密着しており、圖面の繪具は何枚にもわたって滲透していたが、それが反って斷片の接合復原に役立ったのである。傷みのひどい斷片の配置場所の確定には手間取ったようであるが、ともかく配列し終った斷片の状態が第一圖、第三圖である。地形圖の復原すなわち斷片の配列に関しては、帛書整理グループと復旦大學歴史地理研究室(譚其驤氏ら)との間で意見の一致を見ず、第一圖は帛書整理グル

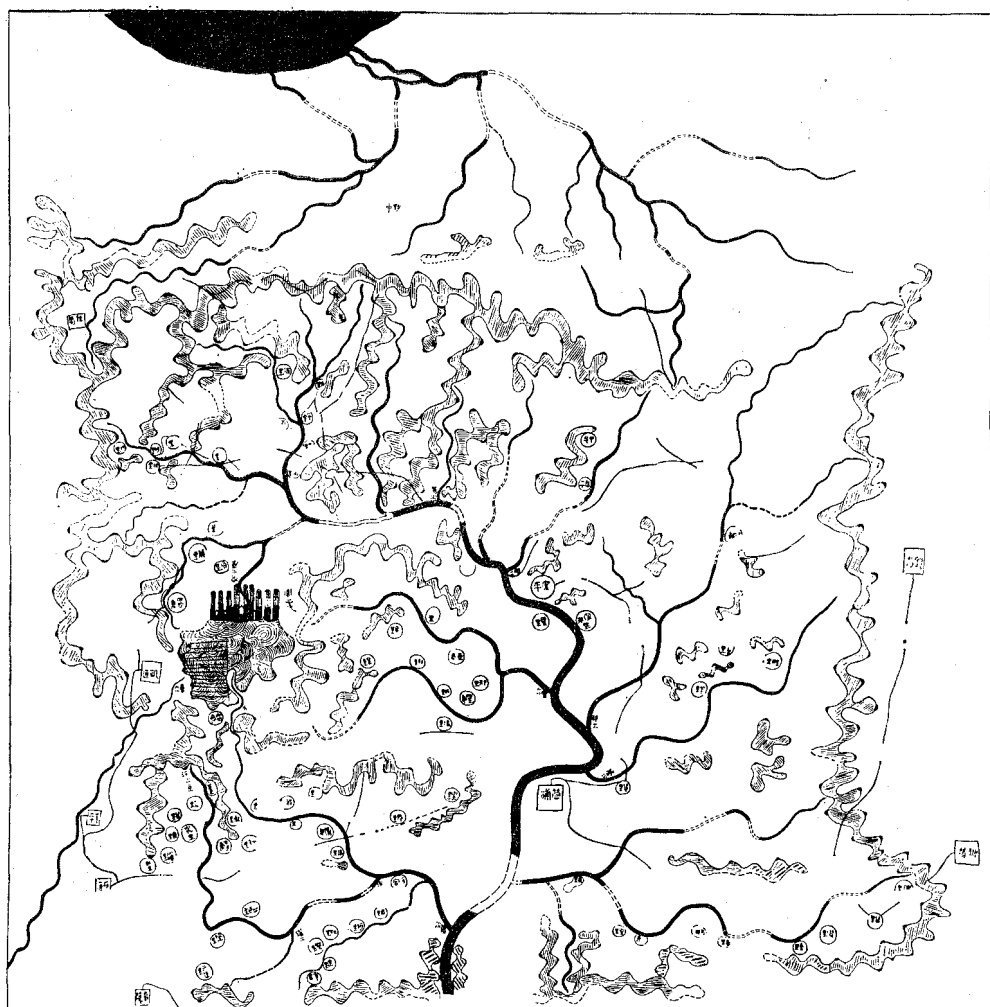


第一圖 馬王堆出土地形圖（『馬王堆漢墓帛書古地圖』による）

1. 作成のものであるという。^④ 復原後の地図の大きさは、地形圖が一邊約九六センチの正方形、駐軍圖が九八×七八センチと計測されている。出土した際の状態や復原作業過程の詳細については、前記の『帛書古地圖』を参照して頂くとして、以下筆者の見解を述べてみることにしよう。

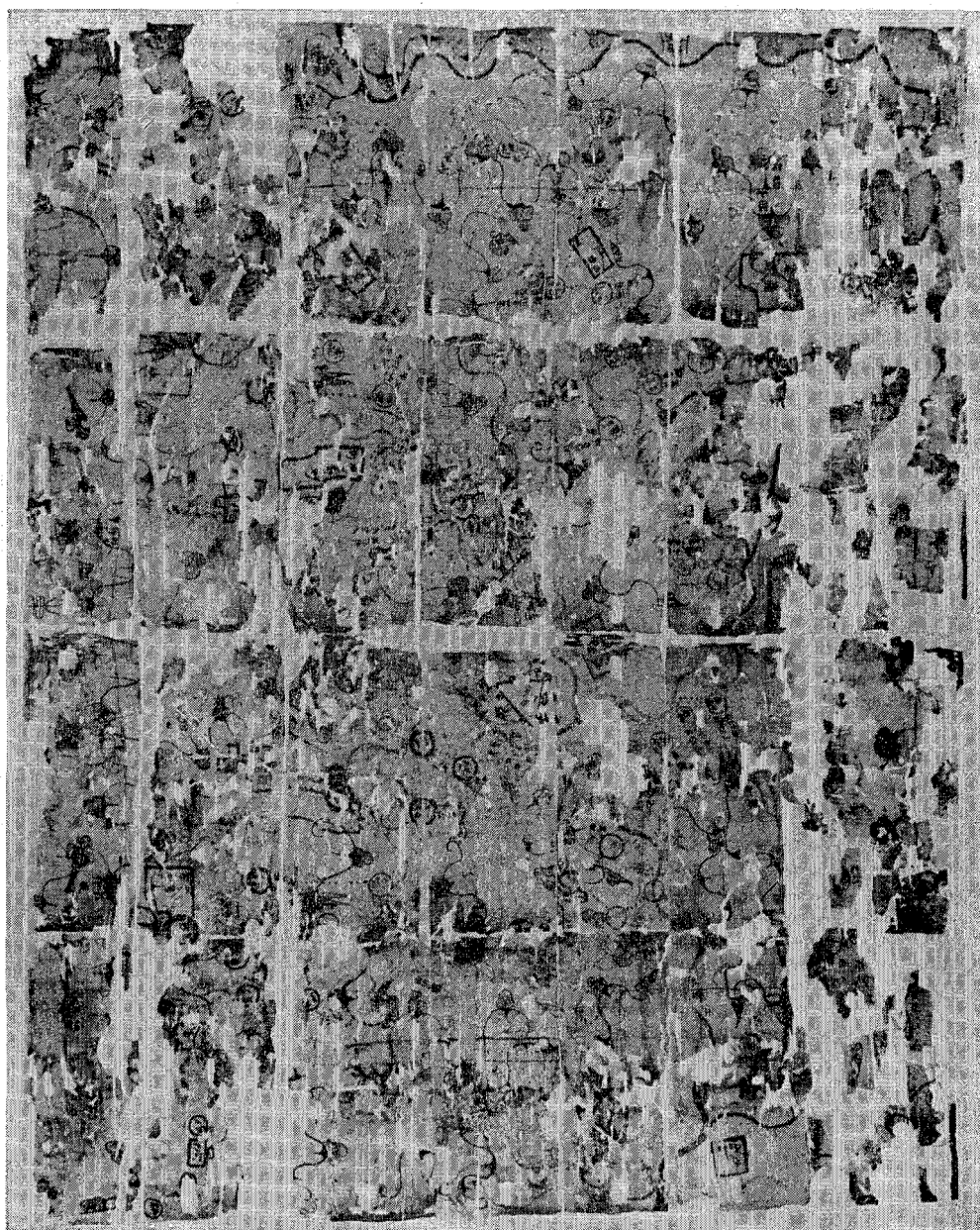
断片の配列 『帛書古地圖』

所收論文(一)には、重なっていた断片の順序が圖解されると共に、それから判断される折りたたみの順序が説明されている。ところが説明文通りに折ると圖解に示される番號と一致しないとして、同論文の和譯者長安氏はわざわざ譯文中に説明原文に従って折りたたんだ場合の各断片の番號を圖示してお

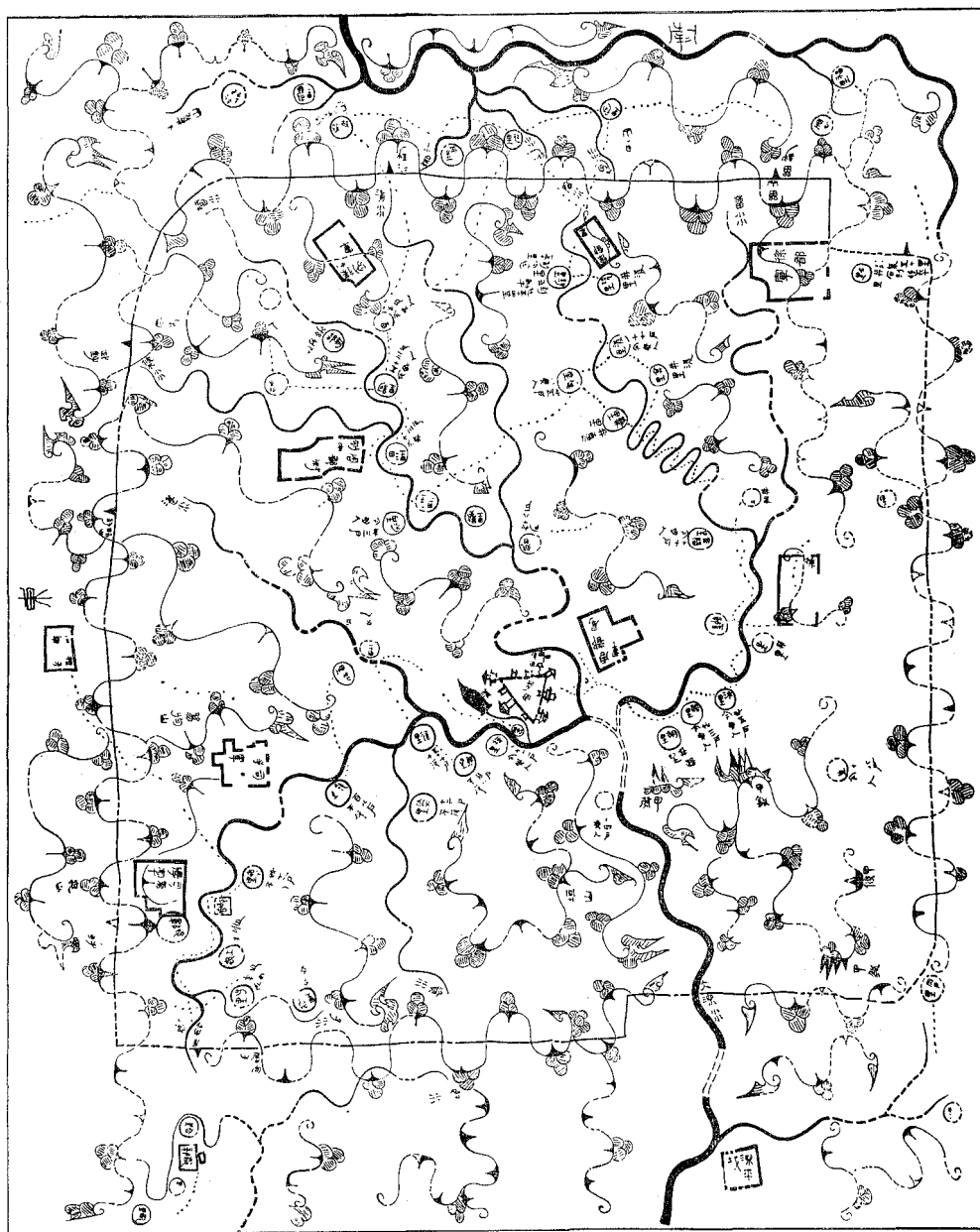


第二圖 馬王堆出土地形圖の復原圖（『馬王堆漢墓帛書古地圖』による）

られる。一枚の紙を用意して原文記載通りに折ってみると、確かに長安氏が訂正された順序になるので、原文の圖解にはどこか誤りがあることになる。この圖解は『文物』誌上でも『帛書古地圖』でも全く同じなので、誤植があるとも思えない。次々と剝離させてゆく過程で撮影された各断片の寫眞番號に誤りがないとすれば、こうした整理グループの配列では到底折りたたみ順序に誤りがあるのか、推定した配列に誤りがあるのか、推定した折りたたみ順序に誤りがあるのか、いずれかであろうが、今にわかに結論を提示するほどの自信はない。秋山元秀氏はこれについて、整理グループによる圖解に従えば最下段の右から二番目の断片の番號が



第三圖 馬王堆出土駐軍圖（『馬王堆漢墓帛書古地圖』による）



第四圖 馬王堆出土駐軍圖の復原圖（『馬王堆漢墓帛書古地圖』による）

1 になっているのは、その破損の著しいことから見て最上層にあったことが納得できるが、長安氏の圖解つまり説明原文によればこの斷片が2となり、左隣の1より傷みがひどい理由がわからぬと言われる。いずれにせよ、既述のように復旦大學歴史地理研究室では、整理グループとは別個の復元を行ったとの事であるから、一日も早くその結果が公表されることを期待したい。

以上は地形圖についてであるが、駐軍圖についても斷片の配列ならびに折りたたみ順序の説明に釋然としないものがある。整理グループが圖解する斷片の通し番號と説明されている折りたたみ方とは一致しないのである。筆者が不可解とするのは、各段が七枚という奇數の斷片から成ること、つまり普通の折り方でないという點である。その寫眞版（第三圖）で見ても明らかのように、右端は特に破損が著しく、一枚分として復元されているこの部分が本來は二枚分であったのではないかと想像される。また圖の左端中央に記入される「東」の文字の位置から見て、上端の「南」の字が右に片寄り過ぎていることも、右端部分の復元に誤りがあるのではないかとの疑いを抱かせる。「南」字の位置の片寄りおよび右端部分の二列の可能性は秋山元秀氏の指摘であるが、同氏は餘りにも不可解なこれら二種の圖の斷片番號と折り方の説明との不一致に關して、すでに副葬品として墓室に納められる以前に地圖は折目からちぎれてバラバラになっていた部分があつたのではないかと推定される。絹布を折りたたんでも紙のように簡単に折目からちぎれるものでなかうと筆者は考えるが、示された斷片の層序番號通りに折りたためない以上、秋山氏の見解には聴くべき點がある。駐軍圖の左右七枚の斷片配列に誤りがないとすれば、右端一列は埋葬のときすでに失われていたのではあるまいか、と秋山氏は想像される。

地圖の保管方法

絹布に描かれた地圖が折りたたんで箱の中に收められていたということは、筆者にとって意外であつた。紙の發明以前における地圖描繪の材料として、多く布が用いられたことはよく知られるところであり、それが麻布であれ絹布であれ、本來は「反物」として捲かれているものである。殊に柔かくて弾力性のある絹布は、たとい地圖に利用されたとしても、捲いて保管するのが一番無理のない方法であると思つていたからである。事實燕の刺客荊軻が地圖奉呈に事寄せて秦王を暗殺

せんとした故事から見ても、當時地圖が捲いて保管されていたらしいことは確かである。その場面を詳細に記述する『史記』卷八十一列傳第二十六から關係部分を引用してみると、

燕の使者を咸陽宮に見ゆ。荆軻、樊於期の頭の函を奉じ、而して秦舞陽、地圖の柙を奉じ、次を以て進む。(中略) 軻すでに圖を取りて之を奏す。秦王、圖を發するに、圖窮りて七首見ゆ。

(見燕使者咸陽宮。荆軻奉樊於期頭函、而秦舞陽奉地圖柙、以次進。(中略) 軻既取圖奏之、秦王發圖、圖窮而七首見。)

とあって、柙(箱)に收めた地圖を秦舞陽が捧げ持つて秦王の面前まで行き、面前では荆軻が箱から地圖を取り出して秦王に差し出し、それを受取った秦王が地圖をひろげてゆくと、最後のところで七首があらわれたというのである。捲いてあった地圖なればこそ七首をかくしておくことができたのであって、折りたたみの地圖であればすぐに露見したであろう。われわれはこの『史記』の記事によって、布製の地圖は捲いて保管するものと思い込んでいたが、今回の馬王堆出土地圖の實例から、絹本地圖であつても折りたたんでおく場合があることを知らされた。餘程糊を強くきかせて最初に折目をしっかりとつけておくのであろう。さもなければ柔い布のことゆえ折るたびに折目の位置が少しずつずれて折目からちぎれるなどということはないと思うが、如何であらうか。

地圖と方位 地形圖には方位を示す文字も記號もないが、比定される集落名・河川名の記入方向から見て、南を上にして描かれていることは明白である。一方駐軍圖には既述のように「東」「南」の兩文字が圖の中央に向かう方向で記入されるほか、圖中の地名の記入方向が一定せず、地圖の上下(天地)が明瞭でない。従つて當時地圖の上方に一定の方角を据えるという習慣はなかったものと思われる。それにしても後世、阜昌七年(一一三六)の『禹跡圖』や『華夷圖』の例からも明らかのように、中國社會では北を上にして地圖を描くことが壓倒的であつたのを思えば、地形圖が南を上にするには何らかの理由がなければならぬ。それは恐らく長沙侯國が漢帝國の南部邊境であつたことと無關係ではないであらう。一般に地圖の下方は手前すなわち自己の側を示し、上方は正面もしくは向う側を示すので、漢帝國の中央部は自分たちの背後にあり、敵對す

る南粵國はまさしく前面にあるという意識が、長沙侯國の人々には強かったにちがいない。その氣持を地圖に表現すると、おのずから南を上にした地圖になる。もし内陸アジアの諸民族と同様に南を正面、東を左、西を右と考える習慣がこのような地圖を生んだとすれば、後世の地圖にもはっきりとその傾向があらわれるはずである。従つて漢代の地圖が一般的に南を上にしていたと結論づけることはできない。一定の方角を上にして描くというような習慣は當時確立されていなかったとするのが妥當な見解であらう。

さて駐軍圖の場合、圖の上下が不明瞭なのは、その用途に由來するものと思われる。というのは、この圖が軍用地圖であり、戰略を練る軍人たちが圖を取圍んで議論し易いように配慮されているからである。つまりこの圖は水平にひろげて見る地圖であつて、壁にかけて眺めることを意圖していいと言えよう。⁽⁵⁾ 同時に出土した地圖の一つが上下の明瞭な一定方向記載型、他がその不明瞭な多方向記載型であることも、社會の一般的風習のみでなく、圖そのものの用途が地圖の記載方向を決める一例として注目されてよい。

山地の表現 地形圖・駐軍圖共にわれわれの眼を引きつけて放さないのは、すでに整理グループや譚其驤氏が指摘するよう、不正確ながら山地を平面的に把えるその表現法である。清代にイエズス會士指導の下に完成した西洋式の圖（康熙內府圖・乾隆內府圖）ですら、山地が記號化された側面形であらわされていたことを思うとき、從來知られていた中國製地圖とは全く異質の方式と言わざるを得ない。もともと山地を平面的に描寫する手法が中國社會にないわけではない。それは早く小川琢治氏によつて指摘された初期の五嶽眞形圖の山地表現である。⁽⁶⁾ 小川氏は五嶽のうちの東嶽泰山について、その眞形圖と現在の地形とを比較して、眞形圖が山脊と谷道とを上空から俯瞰した形で示すものであると斷じられたのである。のち五嶽眞形圖は極端に模式化され、單なる護符として非實用的なものになったが、最初は山地跋涉用の地圖として有效な役割を果していたものであつたという。何故にこうした手法のちの中國社會において消滅したのかは明らかでないが、現存する古地圖には絶えてその傳統を見出すことができない。ところが朝鮮では後世に及んでも尙山地の脈絡を平面的に明示する地圖が作られてい

る。⁷⁾ 恐らく道教や風水説に對する強い關心がこの手法を永く存続させたのであろう。

さて馬王堆出土地圖の山地表現は果して五嶽眞形圖の手法と同じものであろうか。勿論地形圖と駐軍圖では表現方法が同じではない。地形圖ではほぼ一定の幅をもつ山地列として描かれるのに對して、駐軍圖では滑らかに屈曲する一本の曲線としてあらわされる。この點、地形圖の方がいくらか實際に近い表現であり、それを一層記號化すれば駐軍圖に見るような山地表現になるであらう。では地形圖の山地表現はどの程度の正確さをもつものであろうか。また山地列の範圍を示す外周の曲線の突出部にあるふくらみは何をあらわすのであろうか。九嶷山と考えられている圖の中央左寄りの山塊の表現は別として、山地は一般に波型の細長い帶のように描かれている。もしそれが譚其驤氏の指摘のように「曲がりくねった山麓の兩がわの線」であり、「現代の等高線」に近いものであれば、⁸⁾ 山地列の幅がこのように平均化するはずはなく、もっと廣狹の著しい變化に富むものになるであらう。従つてこの場合の「閉合曲線」(整理グループによる)は山麓線ではない。では平地から眺めた山地の側面形に基礎を置くものであろうか。もしそうだとすれば、山峯の部分は幅が狭く鞍部は幅廣く描かれねばならない。このようにいずれの點から考えても、山地の表現にはこれと言つた測量結果を示す確かな證據はなく、單にこの邊りに山地が続いているという判斷で描かれたものと考えざるを得ない。もっとも測量の途次における平地からの眺望によつて確認された山峯や平地に張り出している山端の位置などは、作圖の際に考慮されたであらう。このように見てくると、整理グループが示した「閉合曲線」の突出部におけるふくらみ(三日月形)の山頂・支稜という解釋は、全く見當違いであると言つてよい。ではこのふくらみは何を意味するのか。この表現は駐軍圖の山地線からも類推できるように、河川・道路・境界線などをあらわす線との混同を避けるための單なる記號であり、當時すでに山地を示す線にはこのような記號を用いる約束があつたものと思われる。これが一層極端になつたものが駐軍圖の山地線であり、そこではもはや山地列は幅をもたない一本の曲線にまで單純化され、しかも山字形と丸味のある凸字形の圖形が線を挟んで交互に書き添えられる。ほぼ規則的に屈曲する波狀の曲線が、實測された稜線の平面化でないことは、沒個性的な描き方が何よりも雄辯に物語っている。山地線の末端に先のとがった木の葉狀

の圖形が描かれているが、これも山地のはじまりと終りとを示す裝飾的記號と言うほかはない。いずれにしても、山地表現の平面化志向という點では五嶽眞形圖と共通する面もあるが、圖の成立および用途において兩者は全く異質のものと言うべきであらう。

次にやや表現の異なる地形圖の九嶷山について検討してみたい。波狀の帶として表現される一般の山地と異なつて塊狀に描かれ、その内部は水平毛羽様のいくつかの同心圓圖形で埋められる。測量結果に基づいたものと言えるほどの現實性は認められないが、多くの山峯から成り立つことを示そうとしたものにちがいない。それにしてもこのような平面圖的手法は、護符として退化する以前の五嶽眞形圖における地圖化理念と一脈相通する點に興味をおぼえる。⁽⁹⁾一般の山地と表現を異にするこの九嶷山の場合は、五嶽眞形圖様に描かれていた既存の九嶷山圖を利用したことが考えられる。これと關連して言えることは、この山塊の一部と重なるようにして描かれる柱狀圖形もまた既存の九嶷山側面圖の採用でなかつたかということである。⁽¹⁰⁾南を上にする九本の柱狀グラフに近いこの圖形に關しては、その右側の「帝舜」なる註記および『水經注』卷三十八湘水注の記事に基づいて、それを舜廟の前の九基の石碑であるとする譚其驤氏の見解があるが、縣城・里鄉などの集落記號の大きさと之餘りも大きな不均衡、後述する圖形内部の三區分の石碑として見た場合の意味不明などからして、根據の薄い説と言わざるを得ない。⁽¹¹⁾また東を上にする内部の空白な柱狀圖形が、ほぼ山塊と重なっていることも、これが山峯そのものを示す圖形であつたことを思わせる。この空白の柱狀圖形を整理グループは七本と數えているけれども、破損の著しい折目の部分にかかっているための數え間違いで、各柱の高低の具合から見て本來九本描かれていたというのが、勝村哲也氏の見解であり、氏はまた同様の柱狀圖形が南を上にするものと東を上にするものと二種描かれることについて、東を上にする方を描いていた畫工が、途中でこの地圖の上が南であることに気づき、向きを改めて描き直したため、はじめの圖形の内部が未完成の空白になっているのだと説明される。恐らく正鵠を得た見解であり、いかなる場合でも南を上にして地圖を描くという習慣が當時の社會になつたことをこの畫工の失敗がはからずも傍證した形となり、興味ある指摘と言えよう。

ところでこの九本の柱狀圖形が、模式化された九峯であるとしても、不思議なのは山麓から山頂までを異なる圖柄によって三段階に區分しているらしいことである。らしいというのは寫眞版で見る限り、區分の狀況が明瞭でないからである。こうした表現は現代の山嶽植生垂直分布圖に見るところであるが、漢代にそのような圖ないしは觀念があつたとは思えないので、この三段階が何をあらわしているのか今のところ見當がつかない。しかし九本の柱狀圖形を描いたものがかつて中國社會にあつたらしいことは、『水經注』卷三十八湘水注の次の記事から想像できる。

湘水また北して衡山縣の東を逕ぐ。山、西南に在り、三峰あり。一を紫蓋と名づけ、一を石困と名づけ、一を美容と名づく。美容峰、最も竦傑たり。(中略)山經これを峒嶺と謂う。南嶽と爲すなり。山下に舜廟あり。南に祝融冢あり。楚の靈王之世、山崩れ、其の墳を毀ち、營丘九頭圖を得たり。禹、洪水を治め、馬を血して山を祭り、金簡玉字の書を得たり。(湘水又北逕衡山縣東。山在西南、有三峯。一名紫蓋、一名石困、一名美容、美容峯最爲竦傑。(中略)山經謂之峒嶺、爲南嶽也。山下有舜廟、南有祝融冢。楚靈王之世、山崩、毀其墳、得營丘九頭圖。禹治洪水、血馬祭山、得金簡玉字之書。)

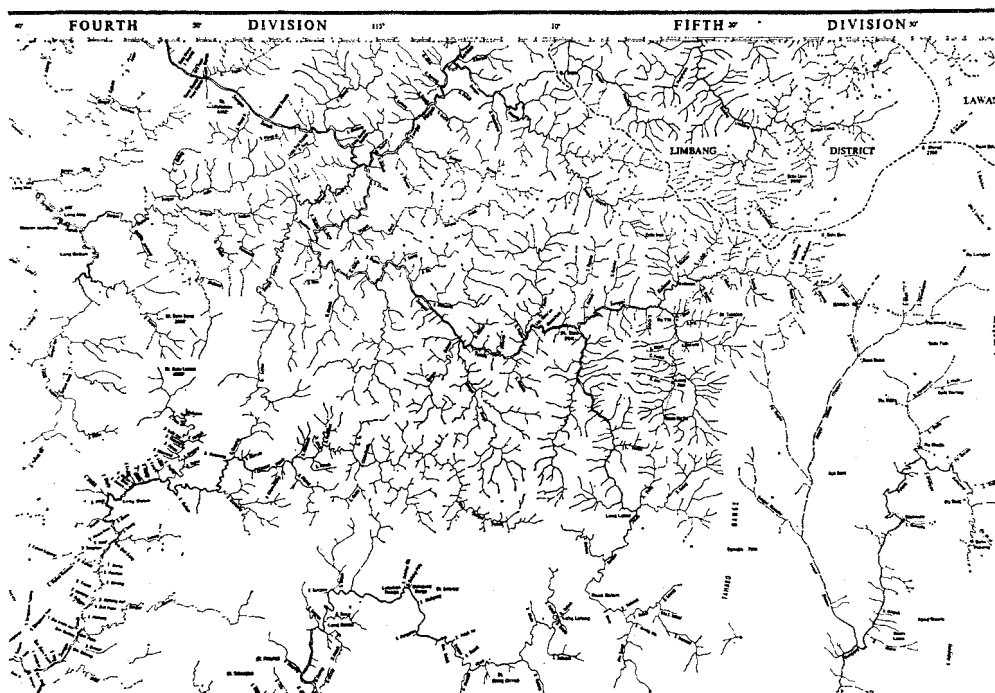
ここにいう「營丘九頭圖」なるものがそれであり、九つの山峯を描いたもののように思えるからである。またここに述べられている美容峯(峒嶺)は九嶷山とは同じ湖南省の山地ながら、遙か北方に位置する南嶽衡山の一峯であり、この「營丘九頭圖」が九嶷山と關係のあるものか否かは明らかでないが、衡山の麓にも舜廟があるという『水經注』の記述は、地形圖の柱狀圖形の傍らに記載される「帝舜」なる文字のもつ意味を教えているようでもある。もともと『水經注』によれば、譚其驤氏がその一部を指摘されたように、舜廟は九嶷山の南および東北その他にもあり、一ヶ所とは限らないのである。⁽¹²⁾

測量箇所 上述の如く山地の平面的表現は、後世の中國製地圖に見られぬ大きな特色ではあるが、その模式化せる圖形から見て山の稜線が測量されたとは到底考えられない。とすれば一體測量の行われた場所はどこであつたのか。

有名な裴秀(二三四—二七一)の「制圖の六體」には、地圖を作るための基本として、分率(縮尺)、準望(交會法)、道里(距離)、高下・方邪・迂直(この三者は土地の高低・起伏、路程の曲直を平面の上に縮小投影する方法)の六つが挙げられ

る。これらのうち實地での測量に關するものは、準望と道里であろう。準望とは見通しのきく高所（主として山頂）を數ヶ所から望んで方位角を測定し、逆に測定地點の位置を正確ならしめる方法であるが、山峯名の記入が皆無（地形圖）ないしは少數（駐軍圖では九ヶ所）であるこれら兩圖の圖面からは、準望の痕跡を探し出すことは困難である。しかしこれらの圖はその縮尺から見て、のちに觸れるように實測圖に基づいて編集された二次的作品の公算が大きいので、大縮尺の實測圖作成段階では準望が行われたことが考えられる。なぜならば兩圖共に圖の骨格をなす水系が、現代の地圖に比してそれほど大きな遜色を示さないからである。

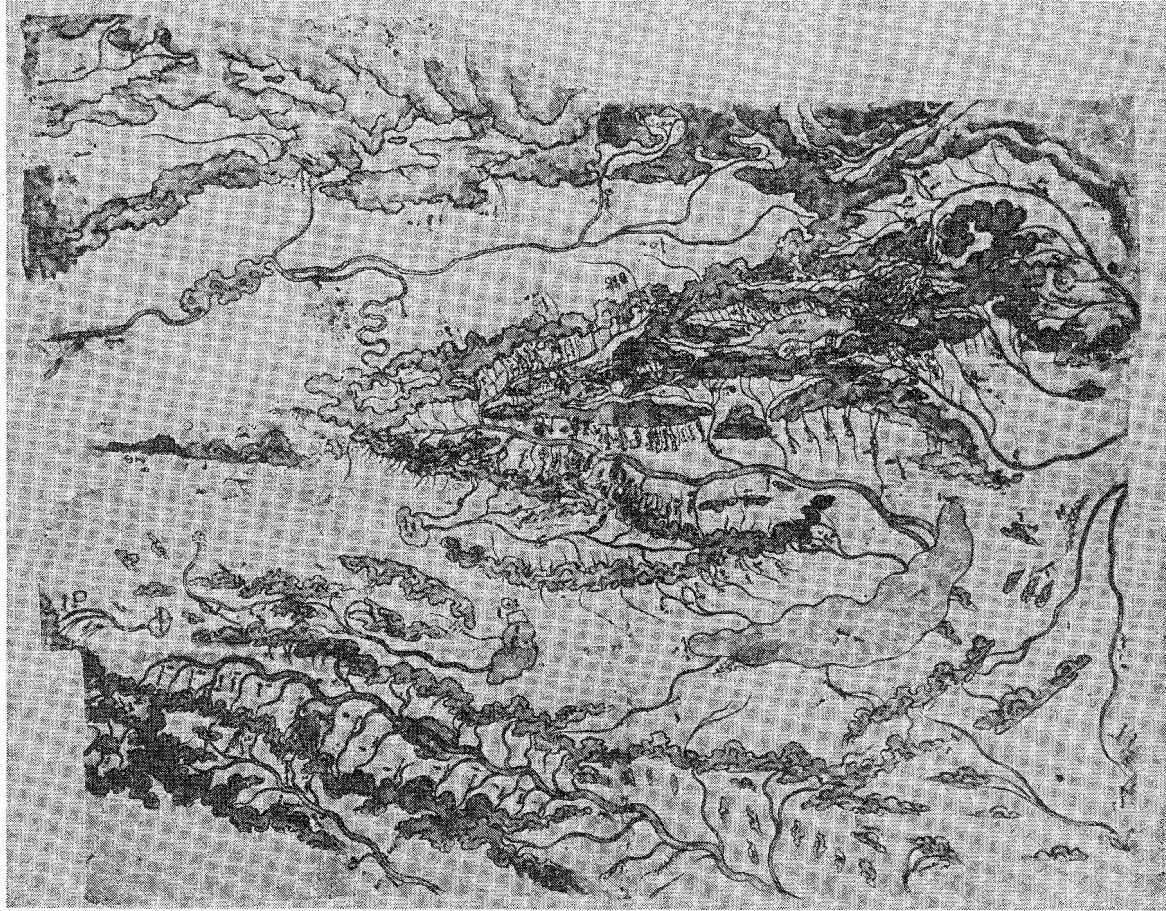
一般に地圖は、それが用いられる社會において重要と見られている地形・地物を強調する。またそのような對象物の測量・製圖は特に慎重に行われる。換言すれば、地圖を一見して最初にしかも強く印象づけられる表現物こそが、その地圖の生命とするところであつて、他の部分よりは信憑性が高いと言える。こうした觀點に立つとき、馬王堆出土の兩圖が最も心をくんでいるのは水系の表現であつて、上流と下流の區別を明瞭ならしめ、その名稱を能う限り詳しく注記していることにおいてそれは疑う餘地がないであろう。特に水源部分や合流點に河川名が記入されることは注目されてよい。譚其驤氏は地形圖について「河川の名稱を記す位置を定めてあることは、この地圖のきわだった長所であろう。（中略）ただ山脈に名稱を記していないのは、この地圖の圖例の大きな缺點である。（中略）九嶷山の名稱さえも記されていないのは解せぬことである。」と述べておられるが、まさしくこの地圖の重點は水系にあるのであつて、山地にはないのである。言ってみれば、この圖の座標軸は水系なのである。このことは駐軍圖にも該當する。では何故に水系が重視されたのか。それには二つのことが考えられる。第一點は水系が當時最も便利な交通路であつたことであり、第二點は地圖作成のための測量箇所として水系に沿うルートがより効果的であつたことであろう。「南船北馬」の風土の「南船」地區にあたる長沙侯國では、道路をゆくよりも水路を利用した方が、人々の交通にも、また軍隊の移動、物資の輸送にも便利であつたにちがいない。もし道路交通が發達していて測量も道路に沿つて行われたとすれば、眼をこらしてやっと迎れるような細い線で道路が描かれるはずはない。河川の水源が明示され



第五圖 サラワク25萬分の1圖の部分（1962年，サラワク政府土地測量局製）

ていることは、一方通行性の強い交通路としての河川の分水嶺を越えての有効的利用に資するためであったと考えられる。現に道路交通の未發達なボルネオでは、今も細長い傳統的な小舟をかつて、目的地に通ずる河川の上流を求めて低い分水嶺を越える。ボルネオ内陸部はかなり峻しい山嶽地帯であるが、森林内の小徑よりは、小流といえども河川の方が一度の運搬量が大きいので、盛んに利用されている。そればかりでなく河川の場合、なきに等しい小徑で道に迷うような心配もなく、害獣や盜賊に出會う危険性も少ないのである。従つてこのような状況の土地では、現代でも地圖に水系が詳細に示される必要があり、その方が位置を知るにも便利なのである。ここに掲げたのは一九六四年に現地で入手したサラワク政府土地測量局製圖の二五萬分の一圖のサラワク東北部すなわちボルネオ山嶽地帯（Long Akah 圖幅の部分）であるが、水系を交通路として用いることの少ない現代日本人の眼には異様に映ることであろう（第五圖参照）。現代は空中寫眞測量術の發達によって、地上測量の困難な場所であつてもその地圖化は比較的容易である。しかしボルネオの如き地圖に記入できるほどの目標物の少ないところでは、水系が恐らく唯

一の有効な連續的地物であることをこの地圖は物語っている。こうした事情は漢代の長沙侯國南部においても同様であつたと思われる。測量のための移動路としても障害が比較的少なく、かつあらゆる場所の位置を示す座標軸としても有効な水系が、地圖化の過程において骨組としての機能を果たしたのは故なきことではなかつた。裴秀のいう高下・方邪・迂直は、測量路線の高低・曲直を、縮尺に應じて平面化・簡略化することを指したものと理解されるが、河川は山稜や峠越えの道に比べて一般に高低・起伏・曲直の度合が小さいから、地圖化の場合の計算も容易である。このように考えてくると、水系が地圖の座標軸として用いられていることの議論において、河川交通中心の社會であつたか否かは問題にならないことになる。つまり「南船」地區ばかりでなく、「北馬」地區の地圖においても、水系がその骨組であつても差支えないわけである。事實現存最古の中國全圖たる前述の『禹跡圖』『華夷圖』共に、「南船」「北馬」の兩地區にわたつて水系を詳細に記入する。その反面道路の記入はこれを缺いているのである。「北馬」地區においても各地點の位置を知る座標軸としては、水系によるのが便利であつたのであらう。さらに「北馬」地區といえども、古くは河川交通が中心であつたらしく、『禹貢』は河川から河川へ移る貢物輸送路について具體的に記述している。また中國社會全體にわたつて水系が地表の位置關係を考える基軸とされていたことについては、『水經』ならびに『水經注』の記載様式が動かぬ證據を提供してくれる。『水經』には『水圖』ともいふべき中國河川圖が伴つていたように思われる。ことによると『水圖』の方がもとで、それによつて經過地點の郡縣名が詳記され整備されて『水經』になつたかも知れない。」と森鹿三氏は述べておられるが、「ことによる」どころか流路に關しては信賴の置ける地圖が、『水經』成立以前に存在していたとすべきであらう。馬王堆出土地圖の内容が十分にそれを證明してくれるからである。中國社會ばかりでなく、交通路としての河川の役割が少なくと見られる内陸アジアの草原沙漠地域においても、水系が地表の座標軸として利用されていたらしいことは、遊牧民の作る地圖の河川が山地に比べて遙かに正確詳細であることから想像される。今ここに一例として、カルムツク（オイラート）族の手になる一八世紀前半の地圖を掲げてみよう（第六圖）。水系の表現が詳細であることは言うまでもないが、南を上にし、山地を平面的に把えることにおいて、馬王堆出土地形圖と軌を一



第六圖 1734年に J. G. Renat がスウェーデンに持ち歸ったカルムック族の地圖
(ウプサラ大學圖書館所藏)

右下の三日月形はバルハン湖，左上を流れるのはタリム河，中央部の山地が天山山脈。

地圖學的見地よりする農田推定地圖の終記

にする。この圖を研究したポペ (Nicholas Poppe) は、中國製の圖の模寫であろうと推定しているが、同時代の中國製地圖に絶えて見ることのない特異な山地表現から判斷して、また南を上にすることを考慮に入れるならば、到底そのような見解は支持できない。むしろカルムック族の傳統的な地圖學を見る思いがする。それにしても山地表現における馬王堆出土地形圖との類似性は、われわれの興味を一層かき立てるものであり、検討してみる價值はありそうである。

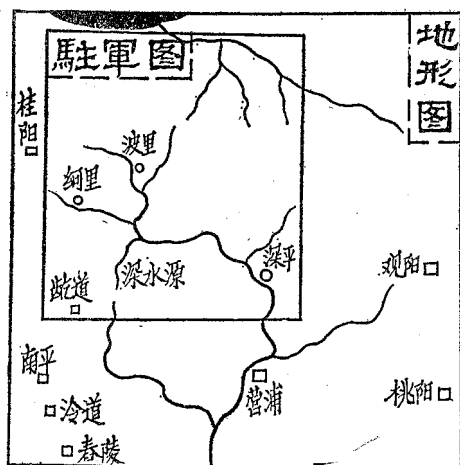
縮尺

先ず地形圖についてみると、譚其驤氏は主要地區すなわち圖の下方中央部、營浦縣を中心とする一帯が最も詳細かつ正確で、約一五萬分の一から二〇萬分の一の縮尺によって描かれているとし、整理グループは主要地點間の直線距離を現行の地圖のそれと比較した結果として、全六例のうち五例が一七・二萬分の一、一七・六萬分の一、一例が一九萬分の一であることを明らかにし、當時の度量衡の一里が三〇〇歩すなわち一八〇〇尺であるところから、公稱一八萬分の一（一寸十里）で統一するつもりであつたのだらうと述べている。¹⁸ 古來中國地圖學における縮尺の表示は、圖上距離と實地距離とを併記する文字式表示であつたから、このように一寸十里と考えて端數の出ない一八萬分の一という數値が得られたことは重要な意味をもつ。一寸十里などという縮尺の呼稱は、圖面に引かれた方格の一目があらわす圖上距離と實地距離とに由來するものであつて、東西・南北の兩方向に引かれた直線が構成する方格は、作圖の過程において不可缺のものであつた。従つて地形圖そのものには方格記入の形跡は認められないが、原稿の段階さらにはそれが資料としたより縮尺の大きい實測圖の段階においては、方格が記入されていたものと思われる。いずれにせよ、一寸十里は一分一里でもあり、現地での測量において直接一里を一分に縮小して描くことはほとんど不可能であるから、この圖が測量結果に基づく一次的作品でないことは指摘するまでもなからう。圖の各部分の縮尺が一定していないこともそのためであり、正確さを必要としない地區殊に南方に隣接する南粵國の領地に關しては、かなり自由な縮尺の變更を行っている。つまり地圖の利用者にとって重要な地區は別としてそれ以外の部分については、正確さよりは利用上の便宜を優先させたのであらう。この點今日でも觀光地圖の中には、このような縮尺上の重點主義を採っているものがあるから、地形圖を必ずしも幼稚な作品であると斷じるわけにはゆかない。むしろ利用者の立場を考えた合

理的な作品と言ってよいであろう。

駐軍圖は地形圖に描かれる範圍の一部分すなわち大深水（現瀧水）の深平城より上流の一帯を主要部分としており（第七圖参照）、この部分の縮尺は整理グループによると、およそ八萬分の一〜一〇萬分の一である。そして東西方向と南北方向の縮尺が一致しないという。この圖の場合、主要地點間の距離の現行地圖との比較が示されていないので、詳細は不明であるが、もし假に八萬分の一と一〇萬分の一との間をとって九萬分の一の目安で描かれたものとするれば、地形圖の縮尺の丁度二倍すなわち一寸五里となり、傳統的な縮尺表示法に合致する。しかしこれは單なる想像でしかないから、確定的なことは今後のより緻密な検討に俟まねばならない。

地圖の作成年代　馬王堆出土の地圖は、それが副葬品であることからして、その墓の被葬者恐らくは利蒼の息子の愛用品であったことは想像に難くない。とすれば埋葬年代とされる文帝の初元十二年（BC一六八）を遡る時期の作品であることは



第七圖 地形圖と駐軍圖の描出範圍の比較（『帛書古地圖』論文⁽⁴⁾による）

勿論であるが、埋葬當時すでに實際の行政や軍事に必要な内容の古い圖であったことを思わせる。地圖は一般に信頼性の高いものほど秘匿され、作成に當っても秘密漏洩を慮って少数数にとどめられる。従って被葬者の手許に同内容の地圖が何部もあったとは考えられず、最新の情報を盛込んだ新圖は副葬品から除外されたはずである。その意味で出土地圖は初元十二年（BC一六八）直前に成ったものではないであろう。ましてや秋山氏の推定のように、埋葬前すでに折目が傷んで離れ離れになっていたとすれば、相當永い年月にわたって頻繁に使用されたものであり、その作成年代は埋葬時期を遙かに遡るであろう。場合によっては被葬者一代のものでなく、何代かにわたって使用されたものであったかも知れない。いずれにせよ、今後における記載内容の一層丹念な調査

から、作成年代が判明することであろう。

地圖の命名 これまで使用してきた地形圖・駐軍圖なる名稱は、はじめにことわったようにあくまでも假稱であり、名稱

についての統一見解はまだ出されていない。地形圖については譚其驤氏が「西漢（前漢）初期長沙國深平防區圖」と呼ぶことを提案しており、整理グループは「西漢（前漢）初期長沙國南部地圖」かまたは南部のあとに「深平防區」の語を加える意見のあることを報じている。⁽¹⁹⁾ そもそも後世において作られた過去のある時代の地圖（歴史地圖）でもないのに、「西漢初期」などという時代名稱を冠することは甚だ理解に苦しむ。漢代の墓から副葬品として出土した以上、當然築墓以後のものではあり得ないから、「馬王堆漢墓出土」または「馬王堆出土」と言えば決して誤解をまねくことはないであろう。

さて内容を厳密に言いあらわすとすれば、深平防區圖とすべきであろうが、防區の境界線が明示されているわけでもなく、作圖者の意圖がどこにあったかも明瞭でないから、漠然と「長沙（侯）國南部地圖」と呼ぶのが妥當と思われる。従って完全な名稱としては、「馬王堆（漢墓）出土長沙（侯）國南部地圖」となるであろう。⁽²⁰⁾

一方駐軍圖の命名については、別稱として詹立波氏の「守備圖」がある程度で、特に提案がなされていない。描出範圍が地形圖のその東南部一帯であり（第七圖参照）、深平城は記入されているものの圖の中心にはなく、主要部分は「箭道」なる文字をもつ三角形の城堡を中心とする一帯である。つまり南粵國に對する防衛前線に重點があると言えよう。従って「馬王堆（漢墓）出土長沙（侯）國南部邊境駐軍圖」なる命名をこの際提案しておきたい。

註

- (1) 曉菡「長沙馬王堆漢墓帛書概述」(『文物』一九七四年九期)
中國科學院考古研究所、湖南省博物館、寫作小組「馬王堆二、三號漢墓發掘的主要收穫」(『考古』一九七五年一期)
- (2) 『文物』誌上では「地形圖」が「地圖」と記されている。
(a)との相違は文章をやや簡潔にしたほか見出しのみで記述が割愛された A Reassessment of the History of Chinese Cartography
- (3) 補訂もない。
- (4) 復旦大學歷史地理研究室・譚其驤「二千一百多年前的一幅地圖」(前掲)
- (5) 整理グループも、文字の方向が一定しておらず、四方から見るのに便利であると述べている。
馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆三號漢墓出土駐軍圖整理簡報」

(前掲)

(6) 小川琢治『支那歴史地理研究』初集(昭和三年)三二四〇頁

(7) 小川氏は哲宗十二年(一八六一)に刊行された金正浩の『大東輿地
圖』を例に挙げておられる。

小川琢治 前掲書

(8) 『帛書古地圖』論文(前掲)

(9) 九嶷山の表現における五嶽眞形圖との関連については、すでに船越
氏・Mei-Ling Hsu(徐美齡)氏が指摘されている。

船越昭生「近年出土の漢代地圖について」(前掲)

Mei-Ling Hsu, *The Han Maps of the Second Century B. C.*

(前掲)

(10) 船越氏は「九嶷山圖の存在を思わしめ、それは山峰・山谷を詳細に
等高線で描き出したもので、それをもとに断面圖ないし側面圖を作
り出すことのできる精細な圖ではなかつたかと考える」としておら
れるが、断面圖や側面圖が作れる等高線法採用圖であつたという推
定には賛意を表し難い。

船越昭生「近年出土の漢代地圖について」(前掲)

(11) 舜廟石碑説は Mei-Ling Hsu(徐美齡)氏が九嶷山山峯説と合せて
紹介している程度で、馬王堆地圖に言及する人々はほとんどが九嶷
山山峯説を支持している。

(12) 『帛書古地圖』論文(前掲)

(13) 故曰九嶷山。大舜窆其陽、商均葬其陰。山南有舜廟。前有石碑、文
字缺落、不可復識。(中略)山之東北冷道縣界、又有舜廟。縣南舜
碑。碑是零陵太守徐儉立。(卷三十八湘水注)

このほか湘水の一支流たる承水について、

東北流至重安縣、逕舜廟下。廟在承水之陰。(同右)

と記しており、舜廟は各所にあったものと思われる。

舜が湖南省南部に葬られたことについては、すでに『山海經』に
次のような記載がある。

地圖學的見地よりする馬王堆出土地圖の検討

蒼梧之山、帝舜葬于陽、帝丹朱葬于陰。(第十 海內南經)

南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九嶷山。舜之所葬在長沙零陵界
中。(第十八 海內經)

(14) 『帛書古地圖』論文(前掲)

(15) 森鹿三『水經注』解説(『洛陽伽藍記・水經注(抄)』昭和四十九
年)

(16) この圖は一七年間カルムック族(ジャンガル汗國)の捕虜となつて
いたスウエーデン人の砲兵軍曹レナト(Johan Gustav Renat)がそ
の支配者ガルダン・ツェリン(Galdan Tseren)から譲り受け、一
七三四年歸國に際してスウエーデンに持ち歸つたものであると云う。
John F. Baddeley, *Russia Mongolia China*, vol. 1, 1919, pp.
clxvi-clxxv

clxvi-clxxv

Nicholas Poppe, *Renat's Kalinuck Maps. Inigo Mundi*, XII,
1955

なおカルムック族も廣義のモンゴル族にちがいないが、モンゴル
族がすべて地圖上の山地を平面的に表現する習慣をもっていたか否
かは明らかでない。左記の文獻に掲載される今世紀初頭のモンゴル
語の地圖の山地はいずれも杜撰な側面形であらわされている。一方河
川はそれに比べると遙かに詳細に描かれているので、この場合も位
置を知るための目標物として水系が重要視されたことは十分に考え
られる。兩文獻に掲載される數種の地圖はいずれも作成年代が新し
く、また描かれる場所もオルドス地方なので、モンゴル族固有の地
圖學を知るには必ずしも適當な資料とは言えない。

Walther Heitsig, *Über Mongolische Landkarten. Monumenta
Serica*, vol. IX, 1944

do, *Mongolische Handschriften, Blockdrucke, Landkarten
(Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland,
Band 1)*, 1961, Tafel XIII-XVI.

(17) 『帛書古地圖』論文(前掲)

- (18) 『帛書古地圖』論文(一) (前掲)
(19) 『帛書古地圖』論文(二) (前掲)
(20) 『帛書古地圖』論文(三) (前掲)
(21) 船越氏は「九嶷山に登る目的のもとにつくられたのではないか」と想像し、「九嶷山遠望圖ないしは九嶷山登山圖とでもいふべき」も

- (22) のとしておられるが、九嶷山の名の記入もなく、特に九嶷山一帯の表現密度が高いとも思えないので、氏の見解には賛意を表することができない。
船越昭生「近年出土の漢代地圖について」 (前掲)
『帛書古地圖』論文(四) (前掲)

(昭和五十三年六月脱稿)